

生き残るため住職が変革

お寺ビジネス上

埼玉県熊谷市の見性院は400年以上の歴史がある曹洞宗のお寺だ。住職はいまの橋本英樹(50)で23代目。その橋本が運営を一変させた。

訪れた人はまず、参道入り口に掲げられた「心得十力条」を目にする。僧侶として守るべき最低限の戒律を橋本が考えたものだ。

質素儉約を旨とする▽原則、禁煙禁酒▽高級車に乗らない▽ギャンブルはしないといつた項目が並ぶ。お布施の「料金表」も掲げてある。葬儀を担う導師がひとりで戒名が「信士・信女」の場合で20万円。以前は50万円もらっていたのを大幅に下げた。

橋本が「変革」に踏み切ったのは4年前だ。檀家改制度をやめて、寺と、檀家改制度をやめ「信徒」との関係を、互いに縛らないものにした。背景にあつたのは檀家数の減少だ。地縁に縛られ、新

送込みで3万円強。宗派や国籍は一切問わない。維持費もいらない。

「お金がなくて墓が建てられない」といった相談が

以前からあり、受け入れられる自信があった。多いと

ければ、寺の経営は立ちゆ

かない。明朗会計とサービ

ス重視を掲げ、ネットを通じて新規開拓する方向へと

かじをきつた。

そこで400軒弱あった檀家との関係をいつたん白紙にし、「随縁会」という会員組織にした。葬儀や法事への対応は今まで通り。

会費は無料。別の寺の檀家になつてもいい。寺は新たになつてもいい。

これまで、ひと月に全国から50人分の遺骨が届く。大半が

寺のホームページを見て申

し込んでくるという。

橋本は駒沢大大学院を修

了後、曹洞宗の大本山永平寺(福井県永平寺町)で3

年間修行した。30歳で米国

に渡り、スタンフォード大

学の仏教学研究所に2年間

籍を置いた。留学時代、日

系寺院に泊まり込んで手伝

いをしていた時期がある。

そこでは寺が葬儀や法事

をするだけでなく、茶道や

華道、書道や太鼓といった

日本文化を伝承する役目を

担っていた。寺が活動に熱

心なのは、日系3世、4世

を仏教につなぎとめるため

でもあった。「みんなのお

寺」を掲げる見性院のヒン

トがあった。

檀家制度をやめても多く

が会員として残り、信徒は

増えた。昨年度の収入は前

年度の1・5倍の約1億5

千万円だったという。

だが橋本の「ビジネス路

線」に対する仏教界の反発は強い。曹洞宗の宗務庁は4月、送骨サービスについて「純粹なる信仰心と宗教行為に対する重大な冒瀆及び誤解の起点となる」と厳しく批判した。

見性院が属する曹洞宗埼玉県第一宗務所の所長、安野正樹(建福寺住職)によると、「檀家の遺骨が勝手に郵送された」といった苦情が別の寺から寄せられているという。安野は言う。

「宗教者が遺骨の郵送を率先して奨励するのはいかがなものか。本当に困つて

いる人を助けたいなら、自ら取りに行くべきだ」

こうした声を橋本は意に介さない。だが本来、「俗」から切り離された「聖性」にこそ宗教の本質があるのではないか。疑問を橋本にぶつけると、こう言った。

「これからは宗教とお金の関係をクリアにし、説得力を持った語れる寺だけが生き残れる。それが私の答えです」



一目で分かる「お布施一覧」と、橋本住職=埼玉県熊谷市の見性院

檀家制度をやめても多くが会員として残り、信徒は増えた。昨年度の収入は前年度の1・5倍の約1億5千万円だったという。

だが橋本の「ビジネス路

線」に対する仏教界の反発

は強い。曹洞宗の宗務庁は

4月、送骨サービスについ

て「純粹なる信仰心と宗教

行為に対する重大な冒瀆及

び誤解の起点となる」と嚴

しく批判した。

見性院が属する曹洞宗埼

玉県第一宗務所の所長、安

野正樹(建福寺住職)によ

ると、「檀家の遺骨が勝手

に郵送された」といった苦

情が別の寺から寄せられて

いるという。安野は言う。

「宗教者が遺骨の郵送を

率先して奨励するのはいか

がなものか。本当に困つて

いる人を助けたいなら、自

ら取りに行くべきだ」

こうした声を橋本は意に

介さない。だが本来、「俗」

から切り離された「聖性」

にこそ宗教の本質があるの

ではないか。疑問を橋本に

ぶつけると、こう言った。

「これからは宗教とお金の

関係をクリアにし、説得力

を持つて語れる寺だけが生

き残れる。それが私の答え

です」

II 敬称略

(佐藤秀男)

橋本英樹 テレビでの発言
キャスターの質問に対する回答

質問 僧侶も経営者たれと言っていますね。どういう意味ですか。

回答 檜家が減り、葬儀や法事が簡素縮小化する流れの中で、それぞれの寺が経営基盤を強化しなければいけないということです。それには思い切った改革が必要です。

質問 檜家制度をやめたのも、その一環だそうですね。

回答 家制度を基盤とする檜家制度は限界に来ています。檜家に依存してきた寺ほど、経営基盤は弱い。お布施収入が減り、新しい信徒も獲得できない。万人に開かれたお寺として、街に出たり、ネットを使ったりして集客する。発想を変えないといけない」

質問 遺骨を郵送で受け付ける「送骨サービス」には批判があります。

回答 違和感を感じる方がいるのは理解できます。しかし料金が3万円で代々のつながりのない信徒だからと言って、決して供養をおろそかにはしていません。お骨を納めた後は寺と関わらないドライな方が半分くらい、あとの半分は菩提寺として愛着が出てくるのか、その後の法要などもお願いされて、寺の経営を支えてくれます。

質問 お布施の額を明示しているのはどうして?

回答 いくらかかるかわからないという価値観は、現代ではなかなか受け入れてもらえない。二つの『ティガクカ』が不可欠です。料金体系を示す『定額化』と、法外なお布施を要求しない『低額化』です。もっと払いたい方からは多くいただけばいい。それが本当の意味での浄財です。多くいただけるかどうかは住職の力量にかかる。お布施は原則非課税ですが、料金化した部分については、例えば一定規模の収益がある寺は、税率を軽減したうえで課税されるのもやむを得ないと思う。

質問 定額料金ならビジネスと何が違うのですか。信仰より「金儲けありき」ととられませんか。

回答 日本の宗教は、サービス業の側面を併せ持った宗教ビジネスだというのが私の考えです。俗世と一線を画すのが本来の宗教ですが、私たちにも生活があり、聖と俗の間を往來している。けれどもあくまで聖なるものを目指し、清貧を尊び、俗化しつつも俗に染まらない姿勢は貫きたい。そのために守るべき心得十か条を掲げています。

質問 宗教と経済、信仰とビジネスは両立できるのですか。

回答 究極的に難しい問題です。そこをクリアに出来たお寺が生き残れる。それが私の答えです。当然賛否はあるでしょうが、旗幟を鮮明にして世に問う、一定の説得力を持って宗教と経済の関係を語れる、あるいはその解決に向けて日々精進しているお寺は強いはずです。

質問 競争原理から切り離されたところに宗教はあるのでは。

回答 程度問題だと思います。競争原理が働くところでモチベーションが働くのか、努力してもしなくても結果が同じでは、人間を堕落させます。

質問 お寺の再編や淘汰が進むのですか。

回答 淘汰されるところが出てくるのは民間企業と同じ。ただ、志のあるお寺は救済すべきです。私の夢は、たとえば見性院ホールディングスのようなグループを作り、経営的に苦しいお寺を見性院のビジネスモデルで再生されることです。これからは本山と末寺のような上下関係ではなく、志のある寺が集まった横のつながりによるグループ同士が、社会の為に競い合う関係が理想ではないでしょうか。

質問 グループ化したら宗派の違いは関係ないのですか。

回答 もともと各宗派の教えは大同小異で、大きな違いはありません。宗派内のグループと、宗派の垣根を超えた超宗派グループと両方あります。一宗派に固執するより両方のグループに属する二刀流が強いでしょうね。いずれ宗派から独立する有力グループも現れるかもしれない。各宗派の本山の影響力は、今より小さくなると思います。